Branch Kagoshima

No.11

ブランチかごしま

北九州市立大学同窓会鹿児島支部会報

「鹿児島を、鹿児島の若者から、そして、世界の若者から選ばれる地域にしていきたい。」

合同会社hataori 代表　髙橋（たかはし） 空雅（くうが） さん【H31/地域創生学群卒】

2019年に地域創生学群を卒業した髙橋空雅（たかはしくうが）さん。

現在は地元・鹿児島で合同会社hataori（はたおり）を起業し、県内に住む若者を対象にさまざまなプロジェクトやイベントを企画し、まちづくりや地域おこしを担う新たなリーダーの育成に取り組んでいます。

「ゆくゆくは小学生からおじいちゃんおばあちゃんまで、ひとつの輪で対話し、学び合う、という『郷中教育』のような文化に発展させていきたい。」と将来の展望を語る髙橋さん。

その熱い想いに、同じ鹿児島人として強く共感を覚えます。

サッカーひとすじの少年時代

子どもの頃の夢をお聞きしました。

「小学生くらいまではサッカー選手になりたいと思っていました。」

小学2年生から高校までサッカーひとすじだったという髙橋さん。将来もサッカーに関わる仕事をしたいと考えていたと言います。

部活では、キャプテンを始めリーダー的な役回りも多かったとのこと。この経験が今の髙橋さんの基礎へとつながっているのかもしれません。

そんな髙橋さんが「地域創生」と出会ったのは、高校2年生の頃。

「1個上の先輩で、地域創生学群に進学した先輩の話を聞く機会がありました。実習活動や集まる学生のおもしろさに魅了されて、進学したくなったことを覚えています。」

門司の商店街で過ごした学生時代

北九州のまちづくりの世界に飛び込んでいく学群の中で、髙橋さんは「門司商店街活性化プロジェクト」に所属することとなります。

観光地として賑わう門司港レトロ。その一方で、国道を挟んだ中心商店街・栄町は衰退が進みます。人の回遊性を高めるために、商店街の中にある『モノはうす』を拠点にしながら、ハロウィンなどのイベント企画、まちゼミの運営や商店街で開催される夏祭りなどのお手伝いなどをしていたとのこと。

『モノはうす』の雰囲気についてお聞きしました。

「基本的に、地域に若者がいることに前向きな方が多かった印象です。学生だったぼくたちのやりたいことに応援してくれたり、時には厳しいことを言ってくださる方もいて、活動自体はどんどんブラッシュアップされていきました。元々地域であったイベントへの出店や運営のお手伝いは、関わったことが少ない店主さんとも話せる機会でしたし、地域に貢献できている感覚も持てましたね。」

「もちろん辛いこともたくさんありましたが、まちづくりのリアルを体感した3年間でした。とっっっっっても楽しかったです！」と、当時を振り返ります。

インタビューは裏面に続きます。

ふるさと・鹿児島へ

「母が天文館でアパレル店を営んでいたこともあり、漠然と働く場所のイメージは鹿児島だったかもしれません。」

その熱心な活動の根底には、「いつか鹿児島のまちづくりに還元したい。」という高橋さんの想いがあるように感じます。

大学3年生の頃には鹿児島の学生たちと一緒に団体を立ち上げて、イベントを企画するようになった高橋さん。漠然と「鹿児島で何かやりたい！」「卒業まで待てない！すぐやろう！」くらいの勢いだったと語ります。

北九州と鹿児島を行ったり来たりの生活の中で、もっとしっかり『鹿児島の人』として活動したいという気持ちが大きくなっていったとのこと。

北九大在学中から地元・鹿児島の大学生たちと団体を立ち上げて地域を盛り上げる活動に取り組んできた高橋さん。卒業後はフリーランスの立場で、鹿児島のまちづくりに関わっていきます。

「まちづくり会社にもフリーランスとして所属しながら、自分でも就活イベントなどを企画したりしていました。」

そんな高橋さんの活動は2021年、転機を迎えます。合同会社hataoriの起業です。

そのきっかけについて、「24歳かそこらの若者の声は大きな企業や自治体には届かないことも多いので、会社にすることで、少しでも届きやすくしたい、というのもありましたね。」と当時を振り返ります。

「経験や実績がない上に、若いということも重なって、対等に見られていないと感じる瞬間も多くありました。」と苦労も語る高橋さん。だからこそ、まちづくりの未来を担う若者たちへの応援にも力が入るのかもしれません。

そんな高橋さんを慕って、hataoriに集う人の和はさらに拡がっていきます。

高橋さんは今、大学生を中心とした若者たちが学部・専攻を超えて集う『ライフデザインアカデミーMOKUMOKU』というプロジェクトに取り組んでいます。

年間を通じて、学生たちが起業家・デザイナー・公務員・クリエイター、様々な専門家たちの話を聞いたり、離島に合宿に行ったり、企業のインターンシップに参加したりしながら、自分の人生について考えるプログラム。

若者たちと一緒に県内を飛び回る高橋さん、忙しい日々は当分続きそうです。

高橋さんの「鹿児島への想い」

最後にお聞きしました。

高橋さんの「鹿児島への想い」

「人口は減っていくのに、マンションや商業施設がどんどん建って、個人の商店などがなくなってしまったり、大切な景観が崩れてしまったりする様子を見ると、悲しくなりますね。ぼくは、天文館に個人のお店が立ち並んでいる景色が幼少期の記憶として色濃く残っています。ですが、今の小学生たちには、日本中どこにでもあるお店が立ち並ぶ鹿児島の景色が、記憶として濃く残ってしまっているのなら、それはもっと寂しいことだとも思います。いまを生きている私たちだけではなく、これから先に生まれてくる次世代の子どもたちにとっても、日々の暮らしの豊かさや、人生の幸せを感じられるまちになってほしいですし、そんなまちになるために少しでも貢献していきたいです。」

高橋　空雅【たかはし・くうが】
平成8（1996）年　鹿児島市生まれ
県立伊集院高校出身
平成31（2019）年　地域創生学群　卒業
現在・合同会社hataori代表

UKK News　大学は今

新学部「情報イノベーション学部」誕生へ市に協力要請

▲北九州市の武内市長に要望書を提出する津田理事長・柳井学長（大学ウェブサイトより引用）

令和9(2027)年に新学部「情報イノベーション学部」の設置を予定する大学は、今年1月、北九州市に協力要請を行いました。

新学部について、大学は小倉都心部へのキャンパス設置を計画しています。

設置場所については、再開発の計画が進む旦過市場への誘致を要望する声もあり、現在は、北九州市議会の委員会で審議が進められていて、話題は地元市民の間でも関心を集めています。

今回より支部会報「ブランチかごしま」の編集を担当することとなりました中園と申します。

私は、昨年6月に鹿児島支部長を拝命し、約1年が経過しました。

この1年は新しい支部体制の構築に向けて、がむしゃらに突き進んだ日々だったように思います。

今回の支部会報においては、若年層の対するPRを意識しつつ、現役学生や北九大への進学を希望する高校生等にも関心を持ってもらえるよう、若手卒業生のインタビューを中心に据えた構成としました。

今後は、現在、北九大で学業や部活動等に活躍する本県出身の北九大生にも取材対象を広げ、若い同窓生の活躍をみんなで応援する同窓の「和」を創造していきたいと考えています。

北九州市立大学は、本県出身の大島直治先生（旧制七高教授）が初代学長をお務めの下で創立され、以来、多くの本県出身者が本学を巣立っていきました。

私は同窓会創設にも尽力された大島先生の御事績に学び、支部のさらなる発展に尽くしたいと思います。同窓の皆様におかれては、引き続き支部運営への御理解・御協力をよろしくお願いいたします。

同窓会鹿児島支部長
中園（なかぞの）　卓巳（たくみ）
H25/法学部政策卒